

Title	Aグループ : 外国にルーツをもつ子どもをサポートするには?
Author(s)	末岡,加奈子
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 8, p. 89-94
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48300
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Ⅲ ーク

グループワーク 課題の解決策の アイデアを考える

A グループ: 外国にルーツをもつ子どもをサポートするには?

末岡加奈子 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

本グループでは、「少人数在籍校で子ども をサポートするには?」というテーマについて 話し合う予定で議論をスタートした。しかし ながら、「少人数在籍校」の位置付けが、大 都市圏と農山漁村とではその意味合いと対策 が異なること、また、特に「少人数」にこだわ ることでアイデアが限定されてしまう、等と いった意見が出てきたことから、「少人数在籍 校」にこだわらず話し合いを進めることになっ た。したがって、当初予定のテーマを変更し、 「外国にルーツをもつ子どもをサポートするに は?」という、ある意味で本ワークショップ全 体としてのテーマともいえる大きな課題に向 けて議論が進められることになった。

1. 参加者の属性(ファシリテーターを含む)

外国にルーツをもつ当事者3名、教育関係 者2名、実践支援者1名、大阪大学大学院生 3名(兼実践者)の計9名。

2. 結果

「外国にルーツをもつ子どもをサポートする には?」という課題について、遂行するために は何が必要か、まずは各自で思いつくままに ブレインストーミングを行ってアイデアを出し ていった。

その後、各自がそれらのアイデアについて 簡単な説明を加えながら模造紙に貼っていく という作業を行い、グループ全体でアイデア を共有した。以下、【アイデアの共有】を参照 されたい。

さらに、これらを同類のアイデア同士で分

類し、遂行するにあたって必要とされる時間 (期間)別に、「短期」「中期」「長期」に分類しよ うと試みた。しかしながら、表1に記すように、 挙げられたアイデアの多くが中・長期的視点 に立ったものであり、つまり、多くの人が「短 期で比較的簡単に」できることを重要項目とし て位置付けていないことが明らかになった。

そこで私達のグループでは、「短期」「中期」 「長期」という分類の方法ではなく、その内容 をカテゴリー別に分類し、次に、その協働先 として適切と考えられる機関と、そのあり方 について検討を行った。

その結果、まずカテゴリー別の分類におい て、重要項目として大きく三つの観点に絞ら れることがわかった。まず一つ目は、「日本語 の向上、日本文化・習慣の伝達」に関連する もの。二つ目は、「教員の意識」や「学校の体制」 に関連するもの。最後に三つ目として、「保護 者へのサポート」が挙げられた。意味内容が 重複しており完全には分類できかねる項目も あるが、大まかにはこの三つの分類に従って、 その代表的なアイデアと協働先について検討 を行った。表1を参照されたい。

【アイデアの共有】

- ・子どもに自信を持たせるような働きかけを
 - 言語や学力に課題を抱えることが多い ため、自信喪失に陥りやすい
- ・子どもの出身国の文化、特に教育制度につ いて学校が把握する
- ①教師自身が、その子どもに関連する社会背

表1 課題遂行に向けたアイデア(Aグループ)

	アイデアの概要	協働先
日本語の向上、日本文化・習慣の伝達に関するもの	・日本語教室(学習機会)の提供と強化 ・日本語対策と並行した、学力向上対策 ・子ども同士の交流によって、日本の文化も含め、互いの文化を知る機会を提供 ・日本人家庭へのショートホームステイ ・日本語能力が未熟な子どもには、漫画やTV等も活用して、少しでも興味をもたせるように ・・・等	・学校(授業、行事等で) ・自治体 ・地域住民 〈主体〉 ・学校、地域
教員の意識改革や、 学校の体制づくりに関 するもの	・教師自身が学ぶ ・該当児童生徒の出身国の文化や、教育制度について学ぶ ・子どもの可能性を信じて、限界を想定せず、常に様子を見ながら声掛け等を行う ・出来るだけ多くの学校行事への参加や、自己表現の場をもたせる ・教員研修 ・教職員体制 ・特に、国語と社会科での補習 ・他の学校に在籍する当事者との交流 ・日本語支援、母語支援、国際学級等担当教員のネットワークの強化 ・母語・母文化についての学習機会の提供 ・単発でなく継続的な多文化に関する講座や学習会 ・「人権」を切り口に、当事者のおかれている状況について考える機会を提供 ・・等	-大学 -教員養成課程 -外国語大学 -外国語学部や国際交流関連分野 -教育委員会 -自治体 〈主体〉 -学校
保護者へのサポート に関するもの	・安心して参加でき、情報共有ができるPTA活動 ・「日本の学校文化」について学ぶ機会の提供(学校行事、お弁当作り等について) ・「日本の学校文化」への理解が促進されるような意見交換会、保護者同士の交流会、等・家庭訪問の強化 ・・・等	 教育委員会 自治体 地域住民 (主体) 学校、自治体、地域住民

景を学ぶ

- ②教員研修を行う
- ③子ども同士でピア・サポート(同じような立 場の仲間・友人によるサポート)をつける
- ④他の小中学校に在籍する同じ立場の子ども 達との交流の機会を設ける
- ⑤子どもの可能性を「ここまで」と思わず根気 よく見守る
 - 日本語が不自由なことや文化・習慣に慣 れないことから、学力が低い場合が多 いため、教師が諦めてしまうことがある。 背景を踏まえて根気よく付き合うことが

必要である。

- ⑥日本語能力が低い場合、漫画やTV等を活 用して興味・関心をもたせる
- ⑦地域にある外国語大学や外国語関連セン ターとの連携によって、言語能力の向上に 努める
- ⑧母語での教材を入手し、教科指導のサポー トをする
- ⑨母語や母文化についての学習機会を提供す る
- ⑩取り出し授業を行っている場合、原学級で の活動を活発にする

- 発表会や料理会など
- ⑪行政からの理解を得る
- (12)安心して参加でき、情報共有 ができるPTAにする
- (3)保護者への全般的なサポート を行う
- (4)保護者同士の交流を深める (日本人、外国人ともに)
 - -保護者の、日本の学校へ の理解を促進する
- (15)家庭訪問等によって、保護者 と学校との関わりを密にする
- (16)子ども・保護者双方へ向けた、
 - 日本の学校文化への理解を促進する - 遠足等の学校行事、お弁当作りなどの 紹介
- ① 地域の一般家庭にショートステイをする機 会を設け、一般の日本人の生活様式を知る 機会を提供する
 - 当事者の方からの提言であった
- (18)子どもの自己表現の場をつくる
- (19)特に国語と社会での補習授業を行う
- ②作文、地理、歴史、母国の文化について の追加学習の機会を提供する
- ②日本語の特別クラスを提供する
- ②同じ境遇にある子どもたち同士の母語での 交流を図る
- ②アイデンティティの問題に関して、あたた かく見守る
 - -揺らいでいるケースが多いため、あた たかく見守ってあげることが必要
- 24メディアで言われていることが全てではな



写真1 立場の異なる参加者同士のディスカッション

い事を、学校で教える

- -メディアでは、国家間関係や歴史的事 実について必ずしも正しくないことも伝 えられており、また、センセーショナル な取り上げ方をする場合も多く、国民に 事実が正しく伝わっていないケースがよ くあるため
- ②人権問題に関連させて、他国(の人)との関 わりについて学ぶ/学校で教える
- 26異文化理解を促進する
 - 継続的、恒常的な取り組みが必要
 - 日本人・外国人、双方に向けたものが必 要
- ②教職員の体制を強化する
 - 管理職、 担任、 教科担当、 日本語指導 者などの連携
- 28学力向上対策(補習、取り出し授業等)を行 う
- 29多文化共生のための教育を行う



写真2 全体に向けた発表のようす

- 30日本語教育へのサポートを行う
- ③学校の内外に関わらず、関係者のネット ワークづくりと連携を強化する
 - 日本語支援者、母語支援者、国際学級 の担当、地域の人々等

全体としては、おおよそ以上のようなこと であった。なお、類似のものは割愛または統 合し、簡潔な文章に置き換えるよう努めた。

3. まとめ

グループのメンバーの意見に基づき、「外国 にルーツをもつ子どもをサポートするには?」 というテーマに変更し議論を進めることに なったため、つまり、これは他のグループの すべてのテーマを包括しているともいえる。し たがって、その課題の大きさと重要性が関係 して、「短期でできること」への具体案が少な かったものと考えられる。また同時に、この

課題を考えるにあたっ て、いずれにしても「長 期戦」であることは大 前提という点が共有さ れていると感じた。実 際に実践に関わってお られる方々や、当事者 の方々など、現場の事 情に精通しておられる 方が多かったことも関 連してか、これまでの 経験知や日本社会の歴 史、文化・習慣を鑑み た上での、「息の長い

仕事」であるとの位置付けであったと感じた。

ただし忘れてはならないのは、「息の長い什 事」とはいえども、日々の小さな取り組みの積 み重ねがあってこそ成立しうる「中・長期計画」 である。そして、そういった「小さな取り組み」 を地道に行うのは、政治家でも行政機関で もなく、地域や職場で共に生活する私達一人 ひとりなのである。

なお、本グループワークで頻出したキーワー ドは、「連携」「地域」であったと言える。当事 者の子どもが一日のうちの多くを過ごす「学 校」という場において、学校教職員の取り組 みはさることながら、学校外での地域住民や 自治体との「連携」が強調されていた。それぞ れに異なった立場から異口同音に「連携」が 強調されていたことは何を意味しているのか。 つまり、この課題がすでに特定の担当者のみ が関わって解決できる課題ではないというこ

と、この課題がすでに社会全体で取り組むべ き大きな課題であるとの共通認識を得ている こと、の表れであろう。次のステップは、こ こに参加している各々が、それぞれのコミュ ニティでこれを展開していくことなのである。 日本社会がより多くの人に開かれた住みやす い国になることは、ひいては、日本に牛まれ 育った日本人にとっても住みやすい国である ことは間違いないだろう。

「安心と安全の国、美しい日本」とは、政治 家が造るものではないのだという紛れもない 事実を、あらためてしみじみと感じた一日で あった。

〈参加者の感想〉

- ・外国人のことを理解しようとしている人が多く、ありがたい。
- ・多文化共生について、セミナーや論文発表等でのお話を聞くと、どうしても先に頭 で考えてしまうことが多く、これまでに読んできたものの「感想」になることが多かっ

たように思う。今日、この場で似たような経験の方々に出会えて、そしてみなさんも頑張ってい るのを知ると励みになります。今日は参加出来て、本当によかったです。何かを変えられるよう、 私も頑張りたいと思いました。

- ・共通の思いや悩み、将来のことについて話が出来て学んだことが多かった。もっと交流の場を持っ てほしいと願うとともに、教育について考えられたことがとてもうれしいです。
- ・学校でサポートするにあたっての、当事者のお話や意見がとても参考になりました。
- ・たくさんの意見、お話がきけて、また"頑張ろう"という気持ちになりました。
- ・現場を変えようとする人の多さ、気持ちの強さに驚きました。今日のような場が定期的にあると 良いと思います。
- ・対話からすべてが始まる。知って、考え、そして行動する。
- ・"協働"が大切。一個人、一団体だけが頑張るのでなく、「皆の問題」として多くの人達、機関、団 体を巻き込むことが大切だと思いました。

参加者の声

有江ディアナ(大阪大学大学院国際公共政策研究科博士前期課程)

「外国にルーツを持つ子どもたち」のために研究や活 動をする方、教育関係者、学生、そして当事者、其々 の立場から「外国にルーツを持つ子どもをサポートす るには?」というテーマで意見を出し合った。理想と現 実の意見がぶつかり合い、短時間で解決策を見つけ ることは難しかった。しかしながら、以下三つの提案 に関して、意見がまとまった。

一つ目は、外国にルーツを持つ子どもの保護者の サポートである。具体的に、日本人と外国籍の保護者 のネットワークを作ることである。学校、地域、子ど もたちのクラブ活動等で保護者のネットワークを作り トげることで、外国籍の保護者は日本人の保護者か ら情報を得ることができる。また、保護者同士が話す ことによって、保護者自身が異文化に触れ理解し、子 どもにも伝えられ、子ども同士が仲良くなることが期 待できる。もちろん行政にも、定期的で正確な情報提 供が求められる。

二つ目は、日本の文化を教えることである。「日本 の文化」というよりも「日常生活を知ること」を当事者 は望んでいる。挨拶、食事、訪問の仕方、電話の取 り方など。学校で行われる修学旅行や遠足等の大き な行事はもちろん大事であるが、課外授業やホーム ルームの時間を利用して、住んでいる地域のことを教 えてくれる人が必要であるという意見もあった。また、 「ショートステイ」という意見もでた。授業や教科書で 学ぶよりも、日本人宅に数日から一週間程度泊まるこ とで、子ども同士がお互いを知るきっかけになる。また、 日本人と一緒に住むことによって、外国人の子どもは 日本の文化や生活をより理解できるだろう。

そして三つ目は、教員の意識改革である。子どもに とって、学校が一日で最も長く活動する場所であり、 学習のためや友人作りのための場所であるだけでな く、将来への希望が持てる場所でなければならない。 しかしながら、教員によっては「外国籍の子どもである ことから、あまり熱心に対応しないこともある」という 意見が出た。

「日本語が通じない、両親が出稼ぎで来日し、しば らくしたら母国へ帰るから」といった考えをする教員は 少なくない。しかし、気がつけば何年も日本で暮らし ている子どもは大勢いる。教員は、外国にルーツをも つ子どもたちにも、他の子どもたちと同じように、熱 心に向き合ってもらいたい。上手く、その子どもたち の良さを引き出し、将来への希望を持たせてほしい。

ただし、教員ばかりを責めてはいけない。今の教育 体制では、教員側も多くの問題を抱え、教員一人が する仕事には限界がある。またなかには、外国にルー ツを持つ子どもたち、日本語の話せない子どもたちへ の対応が初めての教員も少なくない。大学の教員養 成課程のなかで、実践的にこのようなバックグラウン ドの子どもたちと触れ合う必要があり、教員養成課程 自体の見直しが必要と感じた。また、地域の大学と連 携し、学生サポーターを受け入れ、子どもたちの言語 や母国の文化について知って、コミュニケーションをと ることも重要だ。そして、行政側に「多文化共生課」と いう意見を述べる、問題を提起する場所を確保できれ ば、さまざまな問題を迅速に解決に向けて取り組むこ とができるだろう。

振り返ってみると、私たちの提案は他のグループに も当てはまるものである。子どもたちの教育をサポー トするためには、単純に学校、地域や保護者の協力 だけで上手くいかない、行政に頼る必要がある。そし て、行政がしっかりとサポートするには、全国的で柔 軟な政策や制度が今後求められると感じた。